

## 内閣府青年国際交流事業既参加青年調査

- (1) 名 前：伊藤 洋平 (いとう ようへい)
- (2) 年 齢：38 歳
- (3) 参加事業：第 31 回「日本・中国青年親善交流」事業 (2009 年)  
第 35 回「日本・中国青年親善交流」事業 (渉外、2013 年)
- (4) 職 業：株式会社みんなのまちづくり 代表取締役  
一般社団法人まちの toolbox 代表理事  
公益社団法人日本中国友好協会 理事  
認定 N P O 法人東京都日本中国友好協会 理事長



### ■ 応募のきっかけ

大学生の時から参加したいと思っていました。国の国際交流事業というものを体験したいと考えたからです。ただ、大学生の時はお金を出すのに抵抗があったので、社会人になってから行くことになりました。当時は自治体の職員で、海外に接する機会がなかったので、視野を広げたいと考えて参加しました。

実際に参加すると、団長はもちろん、一緒に活動をする団員も多種多様なメンバーがいて、刺激を受けました。訪中した際にも国の代表として訪問する経験から、中国の大学生と交流をする場など、いろいろな観点での中国に触れることができました。

### 数ある国際交流事業のなかで、内閣府の事業に参加しようと思ったきっかけは何ですか。

新聞の一面の右下あたりに内閣府事業の募集広告がでていました。当時、実家暮らしでしたので、新聞が家にあったんです。2003 年か 2004 年頃でしょうか。「内閣府青年国際交流事業」としか書かれていなくて、これはいったい何だろうと思って、ネットで調べた記憶があります。その頃は学生で、お金がなかったため応募しませんでした。先輩が内閣府の中国の事業に参加したことがあり、話を聞いていたので、いつか参加したいとは思っていました。

### 内閣府青年国際交流事業の中でも特に、「日本・中国青年親善交流」事業を志望したきっかけは何ですか。

高校の頃から中国に興味があり、大学では第 2 外国語として中国語を選択していました。中国にかかわりたいと思っていましたが、全くチャンスがありませんでした。内閣府の事業で中国のプログラムがあったので応募してみようと思いました。英語要件がなかったのも理由の一つです。

### ■ 事業参加経験がキャリアパスに特にプラスになったこと

本事業に参加したことがきっかけで、中国に関心のある友人が増え、それまでほとんど縁のなかった中国との距離が近くなりました。また、中国留学の奨学金があるということを知り、中国へ留学することになりました。その奨学金は公益社団法人日本中国友好協会のものであったこともあり、帰国後は東京都日中友好協会の会員となり、日本で日中交流の活動を継続することになりました。

特にプラスになったと感じているのは、**中国に関係できる環境**を得られた点。また、目標意識が高く、向上心の高いメンバーに囲まれることで、自身も努力しようと感じられる環境になったと思います。スキルとしては中国語はもちろん、中国と

のコミュニケーション方法やマナーなどを身に付けることができましたし、先を見ながら動いたり、大人数で団体をどう運営していくかということを考えたりする場ともなつたと思います。

さらに、日本国内でのレセプションや中国の要人訪問は公の立場での中国との接し方を学ぶことができました。事前研修や事後研修といった研修を通して訪中を迎えたことが、**団体の運営に関するスキルや各団員のモチベーション維持などについて考える場**にもなつたと思います。訪中をした中での体験というよりは、プログラム全体を通して、身についたものではないかと思ひます。

あえて影響を与えたプログラムについて挙げるとすると、人民大会堂で要人と話をする機会があつたことかと思ひます。今ではその人の名前や役職も忘れてしまひましたが、中国側の随行の方が雲の上の人だと非常に緊張していたのを覚えてあります。私自身は発言の機会はありませんでしたが、重要な立場にある方と接することができる事業に参加できたのだと身の引き締まる思ひでした。

### 交流を通じて、困難を感じたことがありましたか。

訪中当時、中国側では豚インフルエンザの発症の地は日本であるという認識をされていて、日本人は全員マスクを着用するように言われました。中国では、豚インフルエンザの前には SARS が大流行したことがあり、マスク着用は当然の対応だと 2021 年の今なら理解できますが、私は SARS とは無縁の生活を送っていましたので、そんなに神経質にならなくても思ひたり、日本人が「病原体を持ち込む人」として扱われたりしたのが印象的でした。当然、中国でのホームステイはなくなつてしまひ、観光が中心のプログラムでした。プログラム終盤になつてようやく、山西大学で学生と交流することができました。

### これまで中国に抱いていた印象と変化した点がありますか。

農村部を訪問した時に、地元の人々が私たちを見るために家からぞろぞろ出て来たのです。外国人を珍しがっているということが衝撃的でした。外見だけでは外国人だと分からないんですけれどね。中国には、外国人と触れ合う機会のない地域がまだにあるのだと認識した出来事でした。

### 中国を訪問してどのような影響を受けましたか。

中国に対して、何か特定のイメージを持っていたわけではないのですが、中国企業を訪問した際に、利益追求だけでなく、社員のためにしっかりした経営を行っているという話を聞き、中国企業も日本と同じ価値観を大切にしていると感じました。2009 年当時、すでに社員食堂を充実させるなどしていたことが印象的でした。

こういった企業を視察したことが、今の自分に直接の影響を与えているかどうかは分からないのですが、「やらされ仕事」ではなく、「前向きに働ける環境」を作っていこうということは常々考えています。

## ■ 内閣府の事業でしか得られない経験とは

3 点かと思ひます。

一つは**研修の手厚さ**です。事前研修、直前研修、帰国後研修とプログラムを通して充実した研修があります。訪問前にプロトコールが学べたり、訪問メンバーで十分なコミュニケーションを取つた上で参加できたりする環境というのは、訪問する際の充実度に大きな影響があると思ひます。

これは民間でもあるかもしれませんが、報告会終了後も IYEO という OB・OG 組織がしっかりと組織化されていて、継続して活動することが



2010 年、研修の一環として行われた帰国報告会

できることも大きな強みだと思います。

二つ目は**国の代表としての立場での国際交流**が経験できることです。外交官とまではいきませんが、国の事業ということで、国の立場を理解した振る舞いが求められます。日本がどういった立場を取っているのか、そして、どういったものを目指しているのかを考えることで、**その後も日本人としてのふるまいを意識**するようになりました。

三つ目は全国から選抜される**意識が高く優秀な人材が集まる**ということです。各都道府県と内閣府での選考を経た人たちが集まると、文系、理系、学生、社会人が幅広い分野から集まるので、同じものを見ても感じる感じが違います。そういった人たちと寝食を共にすることはこれまでの自分が思い込んでいたことを壊すきっかけにもなりました。また、幅広い分野の人たちが参加しますが、中国に関心があるという部分では共通なので、その共通の意識の中での集まりというのも、**刺激を受けやすい環境**なのだと思います。

### 研修で印象に残った教え等がありますか？

事前研修が1週間近くありましたが、初日から大失敗しました。4人部屋だったのですが、同室の人たちと初日に明け方3時ごろまで話し込んでしまい、体調を崩しました。その次の日から体調がすぐれず、セルフマネジメントの大切さを痛感した出来事でした。「みんな楽しそうだから、自分もがんばって起きていよう」と皆に合わせてることを重視してしまいましたが、その結果、体調を崩してしまうことで、ほかのメンバーに迷惑をかけました。周りにあわせ過ぎず、「これ以上起きていたら翌日に響いてしまうから」と自分の意見を伝えられる強さが必要なんだとつくづく思いました。他の人たちは学生ですが、自分は社会人で参加しているのに、このような状況になってしまって情けない思いをし、大きな学びになりました。研修の内容とは違いますが、共同生活のなかで、自分の意見を伝えることの大切さを知ったことは私にとっては大きな経験でした。

また、印象的だった出来事として、事前研修の最初の自己紹介で、各自の「あだ名」を決めることから始めていたことを覚えています。「なぜ、あだ名など決めないといけないのか、めんどろだなあ」と思いました。ただ、あだ名を決めることによって、現在にまでつながる関係性が構築できたのです。しかも、10年たってもいまだにそのあだ名が使われているんです。こういうことを考えると、あのプロセスは非常に重要だったと思います。

加えて、当時教わった国際プロトコールはいまだに覚えています。**国際的なマナー、日本を代表してどのように振る舞うべきかという話は初めて教わった内容で、とても印象的**でした。国旗の扱い方や、ビュッフェで料理を取りすぎないようにという注意はいまだに思い出します。

内閣府のプログラムは「**団別研修**」として、団員に**自主的に取り組ませる部分が多い**のがよかったと思っています。団員に任せてもらえることによって、皆が創意工夫するので印象にも残りますし、社会人になってから必要とされるスキルが身に付く重要な過程だったと思います。

研修中の団長の存在は大きかったですね。時々「**団長の一言**」というのがありました。団長は事務次官も務められた非常に立派な方でした。

## ■ 事業参加の経験が現在のキャリアパスにどのように影響しているか

2009年の事業参加がその後の中国関係のキャリアのすべてに影響が出ていると思います。大きくはネットワークという点でしょうか。

たとえば、事業OBから中国留学の奨学金の話を知れば、その後留学には行っていないと思います。留学した際には、事業参加時にお世話になった中国側のホストである中華全国青年連合会の人に動画コンテストをご紹介いただき、中国で3位になることができました。このコンテストに出場する経験は私の中国留学のエピソードの一つです。また、留学時には同じ時期に留学していた団員に会ったり、団員が中国に来てくれましたし、団員に紹介してもらった中国人の

家庭を旅行で訪問したりもしました。

スキル向上という点については、2013年に渉外として通訳のような形で事業に参加できたことから、中国語力は上がっていると思います。リーダーシップという点では、2019年には200人規模の訪中団の副団長として参加することになりましたし、20人規模の訪中団では団長として訪問するような形になっているので、着実に身につけているのではないかなと思います。

スキルを向上させようと思って日々過ごしていないので、あまりわかりませんが、この事業への参加がきっかけで**目的意識を持ったり、向上心を持って取り組み続けたり**といった根本的な部分が身についたので、今に至っているのだと思います。



2013年、渉外を務める

### 事業の参加のうちどの部分が「目的意識を持ったり、向上心を持って取り組み続けたりといった根本的なことが身に付く」ことにつながりましたか。

プログラム中、他の団員たちがいつも目的意識について話していたことです。何かを見学している時などに自分の専門分野の観点から感想や意見を言うのです。それを聞いて「そういう観点があるのか」とか、「自分にはその観点はなかった」等気が多かったです。しかも自分より年下の学生がそういうことに気付いているわけです。自分は感度が低くなっているのではないかと思うこともしばしばでした。私自身は、「実際の中国を見る」ということと、帰国した後も継続して何かしたいという目標がありました。訪中時に、渉外だった方から「今回知り合った中国人の大学生と10年後もつながっていたらすごいよね」というようなことを言われて、そういうことをぜひやってみたいなと思いました。結局うまくいかなかったことは残念です。事業参加中は、日々、団員たちが「こういうことをやったらすごだね」とか、「こういうことがやれるといいよね」といった話を頻繁にしていました。そういう話を聞いて、自分も頑張ってみたいと鼓舞されていました。



2019年、団長として訪中

他の団員の志望動機を見ていると、「中国の教育について学びたい」等非常に具体的だったのですが、私は具体的な分野への要望はなくて、「今の中国を知る」とか「今後の中国とのつながり作りを目指して」ということが目標でした。したがって、訪日時にも特定のプログラムに全力投球するのではなく、訪問先それぞれで楽しませてもらい、考えたり、学んだりすることがその都度あったというのが実情です。

中国のプログラムの良さとして、臨機応変という点があります。「もともとはこのプログラムでしたが、やはりこちらの方がよいので・・・」と突然プログラム内容が変わったりします。こういう状況を当時の団長が「**セレンディピティ**」という言葉でうまく表現しておられました。なにかトラブルがあってプログラムを変更しなければいけなくなってしまったときは、団長はいつも「セレンディピティですよ。確かに、Aには行けなかったけど、その代わりにBには行けましたね。前向きな考え方をするのが大切ですよ」と教えてくださいました。このような団長の一言が心に残っています。

## ■ 事後活動について



2019年、OBとしてセミナーを実施

事業参加後は、IYEOの中国関係の活動を中心に企画をすることが多かったです。留学後は日中友好協会の活動を通して中国に特化した活動が増えていると思います。現状、**中国関係はほぼ100%ボランティア活動**です。

帰国後のIYEOの役割も大きいと思います。帰国後イベントをやってみようと思った時、いろいろサポートしていただきました。これまでイベ

ントの企画などやったことがありませんでしたが、このようにやればいんだと学ぶことができました。今思えば、あのサポートは大きかったですね。

当時は思ってもみませんでしたが、今では内閣府の事業で講師やファシリテーターとして話をさせていただいて、一般人だった自分も継続して取り組み続けるとこういった貴重な経験もさせてもらえるのだということを実感していますし、それを事業に参加するメンバーにも伝えていて、モチベーションの一つにしてもらえればと考えています。

2009年の事業がきっかけで、中国とのつながりができて、中国にもっと関わりたいと思いました。日中両国間の関係の重要性というのは当時からずっと言われていて、そういった認識を両国国民がより強めていくことができればと思い、今も活動をしているところがあります。

社会への貢献意識というよりは、国の税金で訪中をしたこと、また中国側も国の事業として私たちに接してくれたことからの恩返しの意識が高まったのだと思います。私自身で社会全体に貢献できるというのはおこがましいことで、私のできる範囲で私が受けた恩を返していきたいという想いです。

### 中国関係のボランティアとして、どのような活動をしていますか。

現在、「公益社団法人日本中国友好協会」（以下、「日中友好協会」）と「認定NPO法人東京都日本中国友好協会」の二つに所属していて、それぞれ理事と理事長をボランティアで務めています。2012年～2013年に中国へ留学して、帰国後、中国人との交流を続けたいと思ったのがきっかけで日中友好協会に入りました。留学の際に日中友好協会から奨学金をいただいていたので、帰国後何か恩返しができればと思っていたのも理由の一つです。



2011年、中国派遣団同窓会の参加者

入会当初は、中国人の留学生を工場見学に案内したり、日本の競馬場を視察したりするなど、留学生が普段体験できないような活動してもらおうと思ってイベントを企画していましたが、今は組織運営全般、例えば、会員をどのように増やしていくのか、組織をどのように存続させていくのかといった活動が中心になっています。

## ■ 国際的・地域的な人的交流

今でも事業参加当時の人的交流が続いています。中国側の全国青年連合会の人とは訪中した際にお会いしています。最近では**組織対組織としての交流**についても行うようになっていきます。これからは訪問だけでなく、**実際の事業として実施**するなど、実のある交流につながっていくと面白いなと考えているところです。

事業参加メンバーとも今も交流はあり、刺激を受けています。最近は皆社会人として一定のポジションに就いているので、仕事の話や刺激を受けることが増えました。結婚、子育てをしているメンバーも多くなっているので、対面で会うのは難しいですが、昨年はオンラインで私たちと、次年度の事業参加メンバーとの交流会を行いました。こうした会の実施が、思わぬ仕事でのつながりを生むこともあり、面白みを感じています。

### 伊藤さんの会社 or 所属組織と中国側での交流が行われているのですか？ どのような事業を検討していますか。

個人的には自分の仕事に中国の活動を関連させたくないと考えていた時期がありました。お金のために中国の活動をするとなると、これまでやってきた市民交流的なやり方とは別の方法が必要になると思っていました。まずは、市民交流で基盤づくりをしてからビジネスにとりかかろうと決めていました。現状としては、私の団体を見学したいという方が中国から来られた時には、案内をしたり、お話をさせていただいたりしています。最近は自治体からの依頼で、姉妹都市、友好都

市提携のための仲介役をしています。将来的には中国ビジネスが始められるようにしたいと考えています。

### 事業の課題、改善点等があれば御教示ください。

課題としては、大きく二つあって、1.参加青年同士のネットワーク化が十分にできていないこと、2.中国と関わりたいという想いを受け止められないという部分だと思います。2.については、日中友好協会を紹介するのがよいと考えていますので、1.について申し上げます。ネットワーク化としては、中国側を含めたコミュニティづくりと、日本人同士でのコミュニティづくりがあると良いと思います。中国側を含めたコミュニティづくりについては中国側の協力や予算の問題もありますが、

- ・事前研修への中国側の巻き込み
- ・派遣中の中国側とのコミュニケーションの頻度の増加
- ・派遣中の通訳機能の充実
- ・派遣中の最終日に中国側との振り返りの場を設ける
- ・報告会への中国側の巻き込み
- ・同窓会の中国側の巻き込み
- ・中国側メンバーも含めた全員のグループチャットを作成（派遣年、同窓会全体）



2016年、中国大使館を訪問

などが可能でしょう。最後のグループチャットについては、日本側で作って参加を促すだ

けなので、簡単にできそうです。このグループができれば、同窓会のMLにも流して、興味のある方に参加してもらえればよいでしょう。また、日本側を含めたコミュニティづくりについては、

- ・参加青年のテーマ、分野に応じたコミュニティを作る  
(IT企業に務めている人、国際分野で働いている人、公務員など)
- ・OB・OGであることで活躍できる場をつくる（講演会など）
- ・個別の声かけ

等ではないでしょうか。最後の「個別の声かけ」については、就職した年の6か月後もしくは1年目の終わりぐらいに活動をしませんかという声掛けをすると、社会人になっていろいろなことを経験し、もやもやしている時期なので、ヒット率が高い気がします。こういった地道な取り組みを継続するのが大切だと考えています。

### 応募を考えている人への一言メッセージをお願いします。

私は、この事業に参加する前は中国とまったく関係がありませんでした。特に学歴があるわけでもない一般人として参加しました。それでも、内閣府の事業をきっかけとして、中国の友人、知人ができ、ネットワークが広がって、こうしたご縁で留学にも行かせていただきました。大きなターニングポイントになったのが、この内閣府事業だったと思います。しかし、これをターニングポイントとしていかすかどうかは、皆さん次第であると思います。せっかく参加するのであれば100%使い切ろう！という意識で参加されることをお勧めします。

### 伊藤洋平氏プロフィール

2007年多摩市役所入庁。2009年「日本・中国青年親善交流」事業へ一般団員として参加。2012年市役所を退職し、北京の中国政法大学へ1年留学。帰国後、認定NPO法人東京都日本中国友好協会へ入会し、青年委員会を立ち上げ。2016年株式会社みんなのまちづくりを創業。生涯活躍のまち事業を中心に地方創生の取り組みを展開。2018年公益社団法人日本中国友好協会理事。2020年官民連携のまちづくり法人である一般社団法人まちのtoolboxを立ち上げ、代表理事就任。2022年6月認定NPO法人東京都日本中国友好協会理事長。代表的な取り組みとしては、大学生と高齢者が共生する東京都町田市の桜美林ガーデンヒルズ事業、社長ばかりが暮らす移住者向け住宅、長野県佐久市のホシノマチ団地。